

せりき、万葉集の歌に、イチゴといひし即此也、イチゴは即イチムゴなり、其義は不詳（中略或人の
といふは、イハ發語の詞、チといふ者は血也、コは子也、其子の赤き事血の如くなるをいふなり、
あるべき、草木の名イチといふ者の如き、苧麻をイチヒといひ、棗子をイチヒといひ、覆盆子を
イチゴといふ、苧麻棗子の如き、
血色に似たるの義とも見えす、

〔倭訓栞中編〕

伊編二

いちご

蓬蘽をいふ、日本紀にいちごよめり、冬いちご也、寒いちごとも、時し

らすともいふ、寒莓とも見ゆ、倭名鈔に覆盆子を訓せり、蔓いちご也、一種蔓小きに實大なるを草
いちごともいふ、一種蔓衍して莖に倒刺あるを黒いちごともいふ、黄いちごは懸鉤子也、唐いち
ごも色黄也、又挿田蓼はわせいちご、又おらんだいちごあり、木いちごは樹莓、へびいちごは蛇莓
也、又とつくりいちごあり、叢生藥王也といへり、

〔宜禁本草乾五菓〕

覆盆子

甘酸、樹上生者名樹莓、乾之名覆盆子、多刺平無毒、能縮小便、令髮不白、五月
田中得之、烈
日晒乾免爛、

主男子腎精虛竭、女子食之有子、強陰、痿能令堅長、益氣、輕身、安五藏、益顏色、小兒食之功效同、失採則
就枝生、蛆收時五六分、熟時便採、日晒、治肺虛寒、益腎藏、服之覆其溺器、故取名、

〔本朝食鑑四菓〕

莓訓伊古

集解、莓一種藤蔓、不長、莖有鉤刺、一枝五葉、狀類小葵葉、面背皆青光、薄開白花、四五月實成、著子稀疎、
生則青黃、熟則烏赤、冬月苗凋、俗名津留莓、一種蔓小於津留莓、一枝三葉、面青背淡白、而有微毛、開小
白花、四月實熟、紅如櫻桃、而大於津留莓、味亦純甘、俗名草莓、一種樹高四五尺、葉似草莓、葉狹長、四月
開小白花、結實與前之二莓一樣、但色紅爲異、俗名木莓、其味減於前之二莓、然其樹插之、易生長、能成
叢、故子亦太多、近時專用木莓、家家栽之、以誇其夥也、前之二莓、鋤圃、犁畦、糞土、灌水、辛苦栽培、而後結
子亦少、於是近時用之者稀矣、一種藤蔓、繁衍莖有倒刺、逐節生葉、葉大如掌、面背青白、厚而有毛、六七
月開小白花、就蒂結實、三四十顆成簇、生則青黃、熟則紫黯、微有黑毛、形如熟椹、而扁、冬月苗葉不凋、俗